

TAT 物語にみられる対人不安の表れ方の特徴について — 自己肯定意識との関連から —

岩崎初美¹⁾ 石田 弓²⁾ 原 幸一³⁾

The Feature of interpersonal anxiety of TAT story :
The relation of affirmative self-consciousness

Hatsumi IWASAKI¹⁾ Yumi ISHIDA²⁾ Koichi HARA³⁾

Abstract

The purpose of this study was to evaluate the effectiveness of psychological projective method TAT (Thematic apperception test) as an assessment tool detecting interpersonal anxiety and affirmative self-consciousness on undergraduate students.

On the first study, subjects' narratives to all of TAT cards were analyzed in criteria of evoking high anxiety response and self-affirmatives. Eleven of TAT cards were selected as stimulus cards projecting anxiety and self-affirmative. Subjects responded to an interpersonal-anxiety questionnaire and a self-affirmative questionnaire, and they were asked to make narratives of selected eleven of TAT cards.

The result showed that subjects with high interpersonal-anxiety gave narratives of conflicting or keeping a positive interrelationship with others. On the other hand, subjects with high self-affirmative gave narratives of having a positive interrelationship or expressing a positive expectation to their future.

For the next study, five of eleven cards were selected in criteria of projecting high self-anxiety and self-affirmative; cards 1, 2, 9GF, 13B and 14 were selected.

On the second study, post-TAT questionnaire items were created for feedback to subject's self-understanding of anxiety or affirmative. And the responses of post-TAT questionnaire items were examined. Result showed that subjects with high-anxiety were sensitive to expression of gazing. Through responding to post-TAT questionnaire items, subjects noticed new aspect of interpersonal relationship and their self-recognition as a result.

Key Words ; TAT 物語, 対人不安, 自己肯定意識, 物語作成後の質問

¹⁾ 徳島県障害者相談支援センター Consultation Center for Persons with Disabilities

²⁾ 広島大学大学院教育学研究科附属心理臨床教育研究センター Training and Research Center of Clinical Psychology, Graduate School of Education, Hiroshima University

³⁾ 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima

I 問題と目的

1. 対人不安とは

対人不安は「現実、あるいは想像上の対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態」

(Schlenker & Leary, 1982) と定義され、他者からの評価が大きな意味をもつ点が、他の不安と異なる。他者からの評価は、対人関係を築く、あるいは維持する上で重要な役割を果たしている。そのため、対人不安の高いものは常に他者からどう見られているかを気にし、自分の言動に対して必要以上に過敏になり、対人関係の築きにくさを感じていることも少なくない。

また、対人不安は思春期・青年期に多くみられる。特に青年期では、対人関係の拡大が発達課題に挙げられているが、同時に対人恐怖が好発する時期でもある(調・高橋, 2002)。それゆえに他者からどのように見られているかということにも意識が向きやすくなっている。この「他者から見た自分」への注目が、対人不安に関係していると考えられる。

2. 対人不安と自己肯定意識の関連

人は自分を否定的に見ているときや、特定の対人場面で要求されることに応えられないと感じたときに、対人不安を経験しがちである(Clark & Arkowitz, 1975; Meichenbaum et al, 1971; Rehm & Marston, 1968)。また、対人不安の高いものほど、自己を肯定的に評価する程度が低いこと

(調・高橋, 2002) や、否定的自己評価が対人不安を規定する強い要因となっていること(富田ら, 1999) から、自己評価の問題が対人不安に影響していることが考えられる。

一方、自己肯定意識とは、健康で肯定的な自己意識のことである。これは、自分自身の評価と他者からの評価を受けるものであり、自己受容や被評価意識が関係する。他者からの評価を予測

するとき、自己を肯定的に捉える程度が低ければ、他者からの評価も低く予測し、逆に高ければ他者評価を高く予測すると考えられる。他者からの評価に直面する、あるいは予測するとき生じる対人不安は、自己肯定意識とも密接に関連すると思われる。

3. 対人不安・自己肯定意識と TAT

主題統覚検査 (Thematic Apperception Test : TAT) は、Murray, H.A. を中心とするハーヴァード大学心理学クリニックのスタッフが考案した投映法の一つであり、被検者に TAT 図版から思い浮かぶ物語を、過去・現在・未来の時間的流れに沿って作らせることを通じて、被検者のパーソナリティ特性や不安、攻撃性、自己像などを推察することができる。

TAT における物語(以下、TAT 物語)の内容から特にうかがい知ることのできるものは、被検者の人間関係であると言われている(鈴木, 2004)。その理由として、図版の中に人物が描かれていることが考えられる。TAT には人物が描かれている図版が多くあり、2人以上の人物が描かれていれば、その相互関係が語られやすい。また、人物が1人しか描かれていない図版でも、被検者が別の人物を自発的に登場させ、図版に描かれている人物との関わりを述べることもある。さらに、2人以上の人物が描かれている図版でも、ほとんどの場合、向かい合っていない。こうした図版の特徴は、物語の内容を多岐にわたらせるための多義性の確保というだけでなく、人間関係のさまざまな問題の検出に役立つと言われている(安香・藤田, 1997)。向かい合っていない図版は、複数の人物間に無関係を含むさまざまな関係を想定させうる。そのため、向かい合っていない状況に対してどのような物語を作るかということに、被検者の意識的あるいは無意識的な人間関係が投映されることが推測される。加えて、TAT 図版はいずれ

も暗く憂うつな印象を抱かせるものであり、作られる物語の中では、人間関係における否定的場面が想起されることも少なくないと思われる。

こうしたことから、対人関係において不安を感じやすいものとそうでないものとは、TAT 物語の展開や筋の作られ方が異なるのではないかと考えられるが、これまでの対人不安に関する研究の中で TAT を用いたものはほとんど見られない。そこで本研究では、TAT 物語に対人不安の特徴がどのように投映されるかを明らかにする。

また、TAT では図版のもつ刺激特質（主に対人関係）によって内面が触発され、自己が投映される（安香・藤田，1997）。TAT には自己像を投映しやすいとされている図版（3BM, 8GF, 12BG, 14, 15, 17BM (GF), 20）（安香・藤田，1997；坪内，1984）が存在し、それらを用いることによって自己イメージを探索することができる。自己イメージがどのようなものであるかによって、物語の雰囲気や内容が異なる可能性もある。そこで本研究では、自己肯定意識の高さによって、物語に違いが見られるかどうかを検討する。

4. TAT による自己理解

TAT は被検者のパーソナリティ特性や人間関係をアセスメントする目的で行なわれるため、実施中や実施後に、被検者も自分が作った物語から自己のものの見方や感じ方の特徴、あるいは対人認知のパターンなどに気づくことがあると思われる。しかし、従来 TAT は検査者が被検者の内面を把握するために用いられており、被検者自身の気づきについては考えられていなかった。そのため、検査者は物語の邪魔をせず、被検者が物語に集中できるように、物語の詳細を明らかにするための質問以外は何も行なわない。一方、描画法などの他の投映法では、実施後に被検者の反応に対して何らかの質問を行なうことが多い。これは、心理テストの結

果を話し合うことによって、被検者が自分の抑圧していた感情を解放したり、これまで気づかなかった考え方や欲求などを理解し、自己洞察を行なう（高橋，1986）ことができるからである。そこで TAT においても、物語を作成した後に質問することで、被検者自身が物語を振り返り自己を意識することで、自己理解が促される可能性がある。

TAT 図版では、ある程度登場人物の置かれた状況が設定されている。被検者は図版が示す状況をもとに、思い浮かぶ登場人物のさまざまな反応や状況の変化について、自発的な選択を行ない、物語をひとつの方向へと進めていく。ここで展開される物語のパターンは、日常生活での自分らしい行動様式や態度と類似している（山本，1992）。この TAT 物語を振り返ることで、普段は意識していない「自分」に気づききっかけとなることや、対人関係のあり方や捉え方に対する気づきが促されることが考えられる。そこで本研究では、対人不安や自己肯定意識について、被検者の自己理解が深まるような、TAT 物語作成後の質問項目を生成する。

5. 本研究の目的

これまで、TAT は被検者が作った一連の物語を通じて、被検者のパーソナリティの特徴を捉える検査として使用されてきた。各図版によって、投映されやすい特徴があるが（安香・藤田，1997）、対人不安や自己肯定意識がどのように物語に表れるのかは明確にされていない。また、TAT 物語を作成した後の質問によって、対人不安や自己肯定意識がどのように捉えられ、自己理解につながるのかを明らかにすることは、TAT の臨床的有用性を高めることにつながると思われる。

そこで本研究では、対人関係や自己イメージが投映されやすいとされている図版を用いて、青年期にある大学生を対象に、TAT 物語の中に対人不安や自己肯定意識がどのように表れるかを

明らかにすることを目的とする。また、TAT 物語作成後に対人不安や自己肯定意識について、被検者が自己理解を促進できるような質問項目を作成する。

II 研究1

1. 目的

対人不安や自己肯定意識の高低によって、TAT 物語にどのような違いが表れるのかを明らかにすることを目的とする。また、その中でもこれらの特徴がより顕著に表れる図版を選出する。

2. 方法

徳島県内の大学生 170 名（男性 93 名、女性 77 名）を対象として、TAT 物語作成と質問紙への記入を求めた。有効回答は 156 名（男性 89 名、女性 67 名）であった。

(1) TAT 図版 (Murray 版)

安香・藤田 (1997) の研究をもとに、自己像が投映されやすいとされる 11 枚の図版 1, 2, 3BM, 4, 6BM, 8GF, 9BM, 9GF, 13B, 14, 20 を用いた。

(2) 質問紙の構成

1) フェイスシート

学年、年齢、性別の記入を求めた。

2) TAT 物語記述用紙

各図版をコピーした用紙の下に「これはどのような場面か（現在）、これまでにどのようなことがあったか（過去）、これからどうなっていくのか（未来）を含む物語を作ってください」という教示を書き、TAT 物語を記述させた。

3) 対人不安尺度

対人関係質問票（林・小川, 1981）の「対人関係への苦手意識」、「他者からの評価への不安」、「対面時の苦痛」因子に含まれる 29 項目を使用した。「1 全然あてはまらない」から「7 非常にあてはまる」の 7 件法。なお、対人不安尺度は、岩崎 (2006) のデータを用いて作成した。岩崎 (2006) のデータを因子分析（主因子法・バリマックス回転）し、他者との関わりを中心に上記の因子を抽出した。そして、それら

の因子に含まれる質問項目を対人不安尺度として用いた。

4) 自己肯定意識尺度

平石 (1990b) の自己肯定意識尺度 (41 項目) を使用した。「1 あてはまらない」から「5 あてはまる」の 5 件法。

(3) 手続き

上記の質問紙を大学の講義時間に配布し、1 週間後に回収した。なお、調査時は、①フェイスシート、②TAT 物語記述用紙、③対人不安尺度、④自己肯定意識尺度の順に回答させた。

3. 結果と考察

(1) 対人不安尺度と自己肯定意識尺度

対人不安尺度の信頼性係数は $\alpha = .96$ であり、採用するにあたり十分な値であった。対人不安尺度の各項目について、「全然あてはまらない」から「非常にあてはまる」のそれぞれに 1~7 点を与え、その合計を対人不安得点とした。また、自己肯定意識尺度の信頼性係数は $\alpha = .78$ であったが、概ね許容できる値であったため、そのまま採用した。自己肯定意識尺度の各項目について「あてはまらない」から「あてはまる」のそれぞれに 1~5 点を与え、その合計を自己肯定意識得点とした。これらの尺度の相関は $r = .02$ と弱かったため、それぞれにおいて高群と低群にわけた。

まず、対人不安得点について Kolmogorov-Smirnov 検定を行ない、正規分布であることを確認し ($z = .66$, $p > .05$)、得点の上位 25% である 39 名（男性 20 名、女性 19 名）を対人不安高群、下位 25% である 39 名（男性 24 名、女性 15 名）を対人不安低群として、TAT の分析対象とした。また、自己肯定意識の分布についても同様の方法で正規分布であることを確認し ($z = .62$, $p > .05$)、得点の上位 25% である 39 名（男性 20 名、女性 19 名）を自己肯定意識高群、下位 25% である 39 名（男性 25 名、女性 14 名）を自己肯定意識低群として、TAT の分析対象とした。

(2) 図版ごとの結果

TAT 物語について、木村（1983）が行なった物語の分類や鈴木（1997）によって示された物語の着目点を参考に、対人関係や自己肯定意識に関する表現に注目し、得られたデータから各図版の TAT 物語の分類を行なった。まず、各図版で多く語られた物語を 2 つ程度に大別し、それらを物語 I（以下、I）および物語 II（以下、II）とした。I や II に分類されない物語は、その他の物語 III（以下、III）とした。さらに、I および II について、それぞれ理由や状態によって物語を分類し、それらを a-c で表した。また、それぞれの物語の印象がポジティブかネガティブかも尋ね、それらの分類と割合を図版ごとに示した。そして、各図版の分類について各群内で分類別に物語の個数に差があるかどうかをみるために、1 変量の χ^2 検定を行なった。また、対人不安高群 - 低群、自己肯定意識高群 - 低群の比較において、群間で分類別に差があるかどうかをみるために、2 変量の χ^2 検定を行なった。

なお、分類についての評定は、全物語の約 20% について、筆者と心理学を専攻する大学院生 3 名が独立で行なったところ、86.4% の一致をみたため、信頼性があるものとして、残り約 80% の物語については筆者のみで評定を行なった。

【図版 1】

どの群においても、少年が何らかの理由で悩んでいるという物語（I）が多く、図版 1 への一般的な反応と考えられる。悩みの理由については、a) 他者の関与によるもの（例：両親にヴァイオリンをやめろと言われて悩んでいる）と b) 少年の内的不全感によるもの（例：ヴァイオリンが思うように弾けず悩んでいる）に大別された（表 1）。

この図版では、自己肯定意識高群以外の群において、I・b（内的不全感により少年が悩んでいる物語）が有意に多く見られた（対人不安高群 $\chi^2=4.50$, $p<.05$, 対人不安低群 $\chi^2=16.13$, $p<.01$,

自己肯定意識低群 $\chi^2=8.76$, $p<.01$ ）。図版 1 は、TAT 図版を前にしている被検者のテスト状況と同じ構造をもった状況が表されており、被検者の検査への不安、意気込み、緊張、自信などが物語の展開に二重映しとして出てくるとされている（山本、1992）。そのため、他者が関与する物語より、自己に注意が向いている物語が多かったと考えられる。自己肯定意識高群でも I・b が半数近く見られたが、I・a についても他の群より多く見られた。テスト状況の二重映しとして物語が展開されることを考えると、自己肯定意識高群は、TAT に不安や緊張をそれほど感じずに臨んでおり、さまざまな物語が見られたと考えられる。また、どの群においても物語の印象がポジティブであり

（対人不安高群 $\chi^2=7.00$, $p<.01$, 対人不安低群 $\chi^2=10.71$, $p<.01$, 自己肯定意識高群 $\chi^2=8.89$, $p<.01$, 自己肯定意識低群 $\chi^2=6.55$, $p<.05$ ），これは図版 1 の特徴であると考えられる。なお、対人不安や自己肯定意識の高低による物語の内容の差は見られなかった。

表 1 図版 1 の分類(%)

		対人不安		自己肯定意識	
		高群	低群	高群	低群
I	a	25.6	10.3	33.3	20.5
	b	56.4	66.7	48.7	64.1
II		17.9	17.9	17.9	12.8
ポジティブ		53.8	46.2	41.0	43.6
ネガティブ		17.9	7.7	7.7	12.8

【図版 2】

多くの被検者が手前の女性を主人公としていたため、主人公とその他の登場人物（背景の人物）との関わりに焦点を当て、主人公と背景の人物に関わりがあるもの（I）とないもの（II）に分類された。前者は、その関係が a) 親和的・肯定的なもの（例：手前の女性が背景の男性に恋をしている）と b) 違和感がある・関係が否定的であるもの（例：手前の女性が畑仕事を手伝わずに、背景の女性が怒っている）に分

類された。後者は、a)背景の人物について説明しているもの（例：勉強に励む人と農家で働く人と途方に暮れている人がいる）と b)背景の人物を無視しているもの（例：手前の女性が持っている本に現在・過去・未来が書かれている）に分類された（表 2）。

表 2 図版 2 の分類(%)

		対人不安		自己肯定意識	
		高群	低群	高群	低群
I	a	30.8	23.1	38.5	20.5
	b	7.7	12.8	15.4	20.5
II	a	7.7	17.9	12.8	2.6
	b	30.8	20.5	10.3	30.8
III		15.4	17.9	15.4	17.9
ポジティブ		33.3	25.6	33.3	17.9
ネガティブ		15.4	7.7	10.3	15.4

各群間に分類テーマごとの有意差はなかったが、対人不安高群では、I-b（主人公と背景に違和感・拒否的関わりがある物語）より I-a（主人公と背景に親和的・肯定的関わりがある物語）が、II-a（主人公と背景の人物の関わりはないが、背景の人物について説明している物語）より II-b（主人公と背景の人物に関わりがなく、背景の人物を無視している物語）が有意に多かった（I-a: $\chi^2=5.40, p<.05$, II-b: $\chi^2=5.40, p<.05$ ）。このことから、対人不安高群は、主人公と背景の人物に関わりを見出した場合には、その関係を肯定的に捉え、関わりを見出さなければ無視する傾向があることがわかった。対人恐怖心性の高いものは、相手への肯定の意を多く示し、会話を維持しようとする傾向があるとされているが（渡部, 2003）、これは対人関係場面において、相互の関係をよりよく維持しようとする無意識の試みであるとも考えられる。その一方で、対人不安の高いものは、対人信頼感が低い特徴があり（唐, 2007）、傷つきたくないという思いから他者と距離をおくことが考えられる。そうした傾向があるため、主人公と背景の人物について相互関係が想定できなかつた場合には、背

景の人物を無視する物語が作られたものと思われる。

また、自己肯定意識高群にも対人関係を肯定的に捉える物語が多く見られた。TAT 物語では、主人公に被検者自身の内面が投映されるため（山本, 1992）、自己を肯定的に評価していることが、物語の中でも周囲との葛藤や不和を喚起させない要因となった可能性がある。

【図版 3BM】

図版に描かれている主人公が、悲しんでいる、疲れているなどの物語が多く見られた。その理由として、他者が関与しているもの（I）と主人公自身の内的要因による苦悩・疲労感（II）に大別された。I については、a)重要な他者の死やその可能性（例：夫・恋人・家族等の死や不治の病）と b)別離や不和（例：失恋、離婚、喧嘩）に分類された。II については、a)精神的なもの（例：人生が嫌になって落ち込んでいる）と b)身体的なもの（例：疲労、病気）に分類された（表 3）。

表 3 図版 3BM の分類(%)

		対人不安		自己肯定意識		
		高群	低群	高群	低群	
I	a	15.4	2.6	7.7	7.7	48.7
	b	23.1	28.2	20.5	23.1	
II	a	25.6	25.6	25.6	17.9	
	b	17.9	23.1	25.6	25.6	
III		12.8	15.4	17.9	17.9	
ポジティブ		25.6	28.2	28.2	28.2	
ネガティブ		17.9	25.6	23.1	17.9	

どの群でも、身体的な問題を扱う物語（II-b）より、精神的な問題を扱う物語（I および II-a）の方が多く語られたことから（対人不安高群 $\chi^2=10.13, p<.01$, 対人不安低群 $\chi^2=5.45, p<.05$, 自己肯定意識高群 $\chi^2=3.90, p<.05$, 自己肯定意識低群 $\chi^2=7.00, p<.05$ ）、この図版は主人公のネガティブな内的状態についての物語が語られやすい傾向にあると思われる。なお、対人不安や自己肯定意識の高低による物語の内容の差はみられなかつた。

【図版 4】

登場人物を夫婦・恋人あるいは愛人関係と見なすものがほとんどであり、その中で男性の行動を女性が止めている物語が多く見られた。その理由について、男性と女性の直接的な関わりによらないもの（Ⅰ）と男性と女性との間の諍いによるもの（Ⅱ）に分類された。Ⅰはさらに a) 外的要因によるもの（例：仕事、任務）と b) 第三者が関与するもの（例：男性または女性への攻撃に対する怒り、反撃）に分類された。Ⅱについても、a) 男性と女性との対立・喧嘩（例：男性が浮気をしており、それを女性が問い詰めている）と b) 男性が出て行こうとしているが、女性はその意志の受け入れを拒否しているもの（例：男性が女性に誘われたが、妻子がいると断った）に分類された（表 4）。

表 4 図版 4 の分類 (%)

		対人不安				自己肯定意識			
		高群		低群		高群		低群	
Ⅰ	a	5.1	15.4	0.0	2.6	5.1	10.3	0.0	5.1
	b	10.3		2.6		5.1		5.1	
Ⅱ	a	30.8	46.2	25.6	56.4	20.5	51.3	23.1	59.0
	b	15.4		30.8		30.8		35.9	
Ⅲ		30.8		35.9		38.5		28.2	
ポジティブ		15.4		15.4		17.9		10.3	
ネガティブ		33.3		28.2		33.3		23.1	

各群間に分類テーマごとの有意差はなく、すべての群において、ⅠよりⅡの方が有意に多い結果となった（対人不安高群 $\chi^2=6.00$, $p<.05$, 対人不安低群 $\chi^2=20.17$, $p<.01$, 自己肯定意識高群 $\chi^2=10.67$, $p<.01$, 自己肯定意識低群 $\chi^2=21.16$, $p<.01$ ）。このことから、この図版では、図版の登場人物である男女間の直接的な対立や拒否による物語が、標準的な反応であることが示された。なお、対人不安や自己肯定意識の高低による物語の内容の差は見られなかった。

【図版 6BM】

登場する人物については、母－息子あるいはそれに準ずる関係（例：祖母－孫、世話をしてきたメイド－世話をされてきた令息）が大半を占めていた。

2 人の間に積極的コミュニケーションが表現されているもの（Ⅰ）について、a) 男性から女性への働きかけがあるもの（例：息子が仕事で失敗し、母親に弁解しようとしている）と b) 女性から男性にはたらきかけているもの（例：母が息子にガンであることを告げた）、c) 男女がともに主張し合っているもの（例：会社を経営する親子が今後の方針について対立している）の 3 つに分類された。そして、2 人がともに悲しんでいるものをⅡとし、a) 身近な人の死と b) 没落・倒産に分類された（表 5）。

表 5 図版 6BM の分類 (%)

		対人不安				自己肯定意識			
		高群		低群		高群		低群	
Ⅰ	a	28.2	51.3	28.2	35.9	33.3	51.3	23.1	33.3
	b	15.4		2.6		12.8		7.7	
	c	7.7		5.1		5.1		2.6	
Ⅱ	a	10.3	12.8	15.4	15.4	5.1	5.1	15.4	15.4
	b	2.6		0.0		0.0		0.0	
Ⅲ		28.2		46.2		38.5		46.2	
ポジティブ		30.8		43.6		33.3		33.3	
ネガティブ		15.4		10.3		10.3		10.3	

この図版では、登場人物に何らかの関わりがあるものが多く語られ、物語の印象については、対人不安高群以外の群において、ネガティブな印象よりポジティブな印象が多かった（対人不安低群 $\chi^2=8.05$, $p<.01$, 自己肯定意識高群 $\chi^2=4.76$, $p<.05$, 自己肯定意識低群 $\chi^2=4.76$, $p<.05$ ）。対人不安高群と自己肯定意識高群では、ⅡよりⅠが多く見られ（対人不安高群 $\chi^2=9.00$, $p<.01$, 自己肯定意識高群 $\chi^2=14.73$, $p<.01$ ）、対人不安低群でもその傾向が見られた（ $\chi^2=3.20$, $p<.10$ ）。しかし、自己肯定意識低群でも、対人不安低群と同じような割合となっており、すべての群において、同じような傾向があると考えられる。そのため、この図版では描かれている男女の間に積極的にコミュニケーションが想起されやすく、ネガティブな状況をイメージするが、将来的にはポジティブな展開の物語が語られやすいと捉えることができる。なお、対人不安や自己肯定意識の高低による

物語の内容の差は見られなかった。

【図版 8GF】

物思いに耽っているもの（Ⅰ）と絵のモデルをしているもの（Ⅱ）に大別された。Ⅰについて、物思いの内容が、a)明るい、または日常的なもの（例：好きな人のことを考えている、今晚のおかずは何にしようかと考えている）とb)暗い、または深刻なもの（例：何気なく生きてきた自分について真剣に考えている、職場をクビになりこれからどのように生きていこうかと考えている）に分類された（表 6）。

表 6 図版 8GF の分類 (%)

		対人不安		自己肯定意識	
		高群	低群	高群	低群
Ⅰ	a	28.2	30.8	33.3	23.1
	b	28.2	20.5	20.5	17.9
Ⅱ		10.3	12.8	10.3	17.9
Ⅲ		28.2	23.1	30.8	28.2
ポジティブ		30.8	12.8	25.6	25.6
ネガティブ		5.1	2.6	2.6	10.3

どの群においても、分類は同じような割合であった。また、物語の印象について、日常の出来事を空想している物語が多いとされているが（坪内、1984）、本研究では日常的で明るい物語と深刻で自分自身への内省的物語が同じように語られる一方、物語の印象はポジティブなものが多かった。これについては、本研究の被検者が大学生であることが関係していると考えられる。青年期は、自己を見つめ直し、アイデンティティを確立していく時期であるとともに、将来について真剣に考えていく時期でもある。そのため、自己を振り返り、内省するような物語や将来への不安が語られたと考えられる。また、この図版は白地部分が多く、図版自体が比較的明るい印象であるために、ポジティブな印象の物語が多く見られたことも考えられる。なお、対人不安や自己肯定意識の高低による物語の内容の差は見られなかった。

【図版 9BM】

図版の場面を何らかの活動中あるいは活動後の休息（Ⅰ）と捉えたものと図版に描かれている男性たちが遊び疲れていると捉えたもの（Ⅱ）（例：一晩中騒いでいたので昼寝をしている）に分類された。さらにⅠは、a)労働に従事しているもの（例：重労働でこき使われて疲れ切って休んでいる）とb)戦争に従事しているもの（例：戦争中の男たちが体を休めようと草むらで休んでいる）に分類された（表 7）。

表 7 図版 9BM の分類 (%)

		対人不安		自己肯定意識	
		高群	低群	高群	低群
Ⅰ	a	53.8	51.3	46.2	53.8
	b	7.7	7.7	10.3	5.1
Ⅱ		15.4	5.1	15.4	10.3
Ⅲ		17.9	25.6	23.1	17.9
ポジティブ		20.5	20.5	25.6	17.9
ネガティブ		10.3	7.7	15.4	12.8

自己肯定意識低群では、どの物語よりもⅠに分類された物語が有意に多く（ $\chi^2=4.23, p<.05$ ）、対人不安高群と対人不安低群でも同様の傾向が見られた（対人不安高群 $\chi^2=3.27, p<.10$ 、対人不安低群 $\chi^2=3.45, p<.10$ ）。また、どの群においても、Ⅰ-bよりもⅠ-aが有意に多い結果となった（対人不安高群 $\chi^2=13.5, p<.01$ 、対人不安低群 $\chi^2=12.57, p<.01$ 、自己肯定意識高群 $\chi^2=8.91, p<.01$ 、自己肯定意識低群 $\chi^2=15.70, p<.01$ ）。Ⅰは、どの群でも半数程度見られ、それ以外の割合も大きく変わらなかったため、活動中あるいは活動後の休息と捉えた物語が標準の反応と考えられる。なお、対人不安や自己肯定意識の高低による物語の内容の差は見られなかった。

【図版 9GF】

登場している2人の女性が現実の女性であるもの（Ⅰ）と、一方が現実の女性でないもの（Ⅱ）（例：過去の自分を見ている）に分類された。Ⅰはさらに、その女性たちの行動や人間関係について、a)対立的・対極的であるもの

(例：同じ男性を奪い合っている、はしゃいでいる女の子を木の上からこっそり見ている)と b)同質的・相似的であるもの(例：女の子2人が仲良く遊んでいる)に分類された(表8)。

表8 図版9GFの分類(%)

		対人不安				自己肯定意識			
		高群		低群		高群		低群	
I	a	30.8	53.8	5.1	33.3	20.5	56.4	17.9	43.6
	b	23.1		28.2		35.9		25.6	
II		2.6		10.3		7.7		5.1	
III		33.3		38.5		28.2		35.9	
ポジティブ		12.8		15.4		20.5		15.4	
ネガティブ		15.4		7.7		12.8		10.3	

どの群でも、IIよりIの方が有意に多かった(対人不安高群 $\chi^2=15.21$, $p<.01$, 対人不安低群 $\chi^2=4.76$, $p<.05$, 自己肯定意識高群 $\chi^2=14.44$, $p<.01$, 自己肯定意識低群 $\chi^2=11.84$, $p<.01$)。また、対人不安低群では、I-a(現実の女性2人が対立的・対極的關係にある物語)とI-b(現実の女性2人が同質的・相似的である物語)に有意な差が見られた($\chi^2=6.23$, $p<.05$)。さらに、対人不安の高低では、高群にI-aが有意に多い結果となり($\chi^2=7.14$, $p<.01$)、対人不安の高い学生の方が、2人の女性が対立的・対極的である物語を作りやすいことが示された。

Watson & Friend (1969) は、他者からの否定的評価を懸念することが他者からの承認を求め、拒否を回避しようとする動機づけと強く関係していることを示した。すなわち、対人不安が高いものは、他者からの肯定的評価を期待するが、否定的評価を受けることを恐れるという葛藤を常に抱えていると考えることができる。また、Leary (1990) は、個人のもっている自己評価の基準の違いが対人不安に影響を与えると述べており、対人不安の高いものは自分のとった行動について自己評価を行なう際、非常に厳しい基準を用いようとする述べている。このことから、自分自身の中にも「こうありたい自分」と「現実の自分」とのギャッ

プが生じ、それについての葛藤があることが推測される。このような対人葛藤や自己の葛藤が、物語の中の2人の人物に投映されやすいと考えられる。

【図版13B】

主人公が寂しさや悲しみを感じているもの(I)と、それ以外の感情や考えをもっているもの(II)(例：いたづらをした少年が反省している、探検に出る途中兄が忘れ物をしたので、それを待っている)に大別された。Iはa)大切な人の不在によるもの(例：共働きの両親の帰りを待っている)とb)それ以外によるもの(例：仲間外れにされている)に分類され、I-aはさらに不在が一時的であるか(イ)、永久的であるか(ロ)に分類された(表9)。

表9 図版13Bの分類(%)

			対人不安				自己肯定意識			
			高群		低群		高群		低群	
I	a	イ	28.2	38.5	28.2	28.2	23.1	33.3	17.9	30.8
		ロ	10.3		0.0		10.3		12.8	
	b	17.9	56.4	0.0	28.2	17.9	51.3	12.8	43.6	
II			17.9		23.1		17.9		28.2	
III			15.4		33.3		23.1		20.5	
ポジティブ			43.6		15.4		33.3		25.6	
ネガティブ			5.1		7.7		7.7		5.1	

対人不安高群と自己肯定意識高群では、IIよりIが有意に多かった(対人不安高群 $\chi^2=7.76$, $p<.01$, 自己肯定意識高群 $\chi^2=6.26$, $p<.05$)。この図版は、男児が1人で戸口にたたずんでおり、孤独を刺激しやすいものであるため(坪内, 1984)、被検者の多くは男児が孤独であるという印象をもち、その気持ちを寂しさや悲しさで表現していると考えられる。しかし、対人不安低群では、IとIIが同程度の割合となっていたり、I-aの中で重要な他者の一時的な不在の物語のみが語られ、孤独は深くなく、いつか終わるものとして捉えられていた。対人不安の高いもののように他者からの拒否に敏感であるより孤独になる(Russel et al, 1980)と言われているが、対人不安の低いものは、それに比べて孤独を感じる程度

が低く、対人関係へのネガティブなイメージも低いことから、こうした結果になったと考えられる。一方、自己肯定意識低群もⅡの割合が比較的高く、悩みの背景として「親に怒られた」、「友達とケンカした」などが語られた。これは、他者からの否定的評価を受け、悩んでいると捉えることができ、自己評価の低さから、男児が否定的評価を受けて悩んでいる物語が想起されやすかったと考えられる。

【図版 14】

影になっている人が脱出しようとしているもの（Ⅰ）と外を眺めているもの（Ⅱ）に大別された。Ⅰについては a)現在の状態から抜け出そうとするもの（例：病気がちでめったに部屋から出られないが脱出を決行した）と b)盗みに入って逃げているものに分類された。また、Ⅱについても a)影の人物の内的状態があるもの（例：夜明けの空を眺めて「今日も頑張ろう」と思っている）と b)影の人物の内的状態がないもの（例：停電して外の様子を眺めている）に分類された（表 10）。

表 10 図版 14 の分類 (%)

		対人不安		自己肯定意識	
		高群	低群	高群	低群
Ⅰ	a	35.9	15.4	25.6	26.1
	b	2.6	10.3	2.6	10.3
Ⅱ	a	15.4	15.4	10.3	7.7
	b	15.4	28.2	28.2	10.3
Ⅲ		20.5	23.1	25.6	41.0
ポジティブ		30.8	20.5	15.4	20.5
ネガティブ		10.3	10.3	15.4	15.4

対人不安では、高群の方がポジティブな印象が多く ($\chi^2=4.00, p<.05$)、Ⅰ-b (盗みに入って逃げる物語) よりⅠ-a (現状から脱出する物語) が多い傾向にあった ($\chi^2=3.27, p<.10$)。対人不安の高いものは、自分の対人的な行動に対して過度に高い評価基準をもち、いつまで経ってもゴールにたどり着けない (Leary, 1990)。そのため、基準に達することができない自分を否定的に評価し、さらに対人不安が強ま

るといふ悪循環が生じやすい。よって、対人不安の高い学生も、こうした状態からの脱出を望み、脱出が成功するという希望を含んだ未来を予測したことで、物語の印象がポジティブになった可能性がある。

また、自己肯定意識では、高群にⅡ-bが多い傾向にあり ($\chi^2=3.27, p<.10$)、物語の中で窓の外の美しい眺めについての言及が多く見られた。この図版は「希望図版」と呼ばれることもあり、窓の明るさから、未来への希望を象徴しているように語られることが多い (山本, 1992)。自己肯定意識の高いものは、自己実現的態度をもち自己受容度が高く (平石, 1990)、自分を大切にしながら前向きに物事に取り組みやすいと考えられる。現在の自分を肯定的に捉え、前向きに行動することが、よりよい未来の予想へとつながり、何も描かれていない窓の外の景色を「美しいもの」として捉えたと考えられる。

【図版 20】

大切な人あるいはものを喪失したもののⅠ (例：家族も家も失った男性がたたずんでいる) と何か期待しているものⅡに大別された。Ⅱで期待しているものは、a)大切な人あるいはもの (例：恋人を待っている)、b)a以外の人 (例：通り魔の男が若い女性が通るのを待っている)、および c)乗り物 (例：バスを待っている) に分類された (表 11)。

表 11 図版 20 の分類 (%)

		対人不安		自己肯定意識	
		高群	低群	高群	低群
Ⅰ		17.9	7.7	12.8	7.7
Ⅱ	a	17.9	15.4	12.8	23.1
	b	12.8	5.1	12.8	10.3
	c	2.6	2.6	12.8	0.0
Ⅲ		35.9	43.6	38.5	41.0
ポジティブ		17.9	15.4	12.8	12.8
ネガティブ		5.1	15.4	10.3	5.1

自己肯定意識については、両群ともⅡがⅠより有意に多く (高群 $\chi^2=5.00, p<.05$, 低群 $\chi^2=6.25, p<.05$)、対人不安両群でも同様の傾向が見られた。そ

れ以外の語られた物語の割合についても、対人不安や自己肯定意識の高低による物語の内容の差は見られなかった。

(4) 図版の選出

以上の結果より、対人不安の高い学生は、対人関係をより良く維持したいが（図版 2）、その一方で孤独を感じやすいこと（図版 13B）が TAT 物語に投映されやすいと考えられる。また、対人関係への葛藤を抱えており（図版 9GF）、現状から脱出したい（図版 14）と感じていることが示されやすいと考えられる。一方、自己肯定意識の高い学生では、他者との肯定的関わり（図版 2）や未来への希望（図版 14）が語られやすく、自己受容と高さや自己実現的態度が投映されていることが推察される。

そこで、これらの特徴が表れた図版 2, 9GF, 13B, 14 を対人不安や自己肯定意識に関する自己理解を促す可能性のある図版として選出した。

Ⅲ 研究 2

1. 目的

研究 1 で選出した図版 2, 9GF, 13B, 14 に、導入図版としての図版 1 を加えた 5 枚の図版を用いて TAT を行ない、その後に対人不安や自己肯定意識に関する質問をすることで、被検者の自己理解が促進されるかどうかを検討する。

2. 方法

(1) 被検者と実施方法

徳島県内の大学生 34 名（男性 11 名、女性 23 名）を対象として、個別に面接を実施した。まず、年齢、性別、対人不安尺度、自己肯定意識尺度への記入を求めた。次に、5 枚の図版について物語を作成させ、物語作成後に筆者が考案した質問項目を実施した。

質問は、まず筆者が考案した予備段階の質問を 11 名（男性 3 名、女性 8 名）に実施した。そして、得られた回答をもとに改良した質問項目を 23 名（男性 8 名、女性 15 名）に実施した。

(2) 材料

- ① TAT 図版（1, 2, 9GF, 13B, 14）,
- ② 筆記用具。

(3) 予備段階の質問項目

まず予備段階として、安香・藤田（1997）、山本（1992）が見出した TAT 図版の特徴を参考に、TAT 物語を通して対人不安や自己肯定意識に関する自己理解を促すための質問項目を筆者が考案した。

はじめに、作成した物語全体を捉えやすいように、予備質問①「物語全体の共通点」、予備質問②「物語全体の印象（ポジティブかネガティブか）」を設けた。次に、予備質問③「主人公の特徴」で主人公に焦点を当て、予備質問④「被検者と主人公との類似点」で被検者自身に目を向けさせた。また、予備質問⑤「主人公の対人関係」の後、予備質問⑥「主人公の対人関係と被検者の対人関係の類似点」を設けた。さらに、被検者のどのような体験が物語に反映されているのかを明らかにするため、予備質問⑦「被検者の経験と物語の比較」を設け、物語作成や質問による自己理解の程度を尋ねるため、予備質問⑧「自分自身について気づいた点」を設けた。

3. 予備質問の結果と考察

物語の長短に関わらず、TAT 物語作成後の質問では、被検者全員がどの予備質問に対しても 1 つ以上の回答を述べた。得られた回答の内容を、質問項目ごとに筆者を含む臨床心理学専攻の大学院生 3 名で分類した（表 12）。

予備質問①「物語全体の共通点（物語を通して、共通点はありますか）」では、物語全体の雰囲気より、主人公についての回答や物語の形式面についての回答が多かった。また、予備質問③「主人公の特徴（主人公の特徴として、どのようなものがありますか）」や予備質問⑤「主人公の対人関係（主人公と他の登場人物との関係に特徴はありますか）」では、主人公の性格や対人関係

表12 予備質問の内容と回答内容の分類

予備質問項目	分類内容	人数 (%)	
①物語全体の共通点 「物語を通して、共通点はありますか」	物語の印象・雰囲気について言及	ポジティブ	1(9.1)
		ネガティブ	3(27.3)
	主人公の内面に言及 (例: 不安・不満が多い)	5(45.5)	
	物語の形式面に言及 (例: 家族が出てくる)	5(45.5)	
②物語全体の印象 「明るい (ポジティブ) ですか、暗い (ネガティブ) ですか」	個別の図版への言及	5(45.5)	
	ネガティブ	7(63.6)	
③主人公の特徴 「(各図版の主人公を特定してもらい) 主人公の特徴として、どのようなものがありますか」	ネガティブからポジティブへ変わっていく	4(36.4)	
	性格面に関するもの (例: 内向的)	2(18.2)	
	現在の状態に関するもの (例: 悩んでいる感じ)	3(27.3)	
	主人公がもつ願望に関するもの	3(27.3)	
	形式面に関するもの (例: 育ちがいい)	4(36.4)	
④主人公との類似点 「主人公の特徴で、自分と似ている点はどんなところですか」	その他	1(9.1)	
	性格面に関するもの (例: ネガティブさが似ている)	1(9.1)	
	行動傾向に関するもの (例: 常々勉強しているところ)	5(45.5)	
	現在の状態に関するもの (例: 悩んでいる点が似ている)	5(45.5)	
	願望に関するもの (例: 客観的に見たいと思っている)	4(36.4)	
⑤主人公の対人関係 「主人公と他の登場人物との関係に特徴はありますか」	その他	1(9.1)	
	対人関係の現在の状態に関するもの (例: はむかえない)	5(45.5)	
	対人関係のイメージに関するもの (例: ネガティブ)	5(45.5)	
⑥対人関係の類似点 「物語中の対人関係と、自分の対人関係の似ているところはどんなところですか」	対人関係の形式面に関するもの (例: 男女関係が多い)	3(27.3)	
	対人関係全体に関するもの	6(54.5)	
	友人関係に関するもの	4(36.4)	
	家族関係に関するもの	2(18.2)	
	対人関係の捉え方に関するもの (例: 前向き)	2(18.2)	
	特定の状況で感じること (例: 言いたいことが言えない)	7(63.6)	
⑦被検者の経験と物語の比較 「物語の中に、自分が今まで経験したことに似ている物語はありましたか」	対人関係に対するイメージ	2(18.2)	
	ポジティブな経験を思い出した	2(18.2)	
	ネガティブな経験を思い出した	7(63.6)	
⑧気づいた点 「作った物語やこれまでの質問と照らし合わせて、自分自身の考え方の傾向や、対人関係についてどう思っているか、などのことで、気づいた点がありますか」	どちらともいえない	3(27.3)	
	【自分について】	5(45.5)	
	新たな気づき	自分のイメージに関するもの	1(9.1)
		自分のイメージに関するもの	4(36.4)
	再認識	現在の状態に関するもの	2(18.2)
		【対人関係について】	6(54.5)
	新たな気づき	対人関係へのイメージに関するもの	1(9.1)
		願望に関するもの	1(9.1)
	再認識	対人関係へのイメージに関するもの	2(18.2)
		対人場面での自分の状態に関するもの	6(54.5)
その他	1(9.1)		
物語への言及・感想	2(18.2)		

の捉え方よりも、現在の状態や願望について回答されやすいことがわかった。よって、これらの質問では、物語の場面そのものに焦点が当たり、主人公の内面より、そのときの主人公の状態について回答されやすいことが示された。

また、予備質問④「主人公との類似点（主人公の特徴で、自分と似ている点はどのようなところですか）」では、主人公の特徴をもとに回答するものが多かったが、予備質問③での回答以上に多くの内容が回答された。また、予備質問③の回答が主人公の現在の状態や形式的な面についてのみであった場合でも、予備質問④では、性格面について言及するものもあった。TATでは、主人公に被検者自身の内面が投映されるが（安香・藤田，1997）、個人の過去の体験そのものではない（山本，1992）ため、被検者は主人公を別個の存在として認識している。しかし、ここで主人公と自分との類似点について質問したことで、被検者は主人公の人物像をイメージし、それと自分を比較したため、自分自身の性格面や行動傾向に関する回答が促されたと考えられる。

また、予備質問⑧「気づいた点（作った物語や今までの質問と照らし合わせて、自分自身の考え方の傾向や、対人関係についてどう思っているか、などのことで、気づいた点がありますか）」では、「新しく気づいた」という回答よりも、「再認識した」という回答が多く見られた。TAT 物語の内容は、被検者自身の感情・情緒、あるいは習慣となっている思考の仕方によっており（山本，1992）、自分自身や自分の対人関係が投映されている。語られた内容には、以前から「自分の特徴」として知っていたことが多く含まれており、予備質問⑧によって、自分自身と図版の人物（主に主人公）を比較し、その類似点を見出したと考えられる。

4. 改良した質問項目の結果と考察

(1) 改良した質問項目（表 13）

予備質問①では、主人公について言及するものもあったため、物語の内容に焦点を当てるよう、質問①「物語全体の共通点や特徴」とした（物語を通して、共通点や特徴はありますか）。予備質問③では、主人公全員をまとめた特徴についての回答を促したが、主人公の状態についての回答が多く、主人公の性格や行動傾向への回答は少なかった。そこで質問③では、主人公全員をまとめた全体的な特徴を回答させた後、主人公 1 人 1 人のイメージをふくらませるように各主人公の特徴を回答させ、再び主人公全員をまとめた特徴を回答させるようにした。また、質問④「主人公の自己イメージ（ポジティブかネガティブか）」（主人公の特徴も踏まえて、主人公たちは自分で自分をポジティブに捉えていますか、それともネガティブに捉えていますか）と質問⑤「主人公の対人不安傾向」（主人公たちは、他者との付き合いが苦手だったり、他者からの評価を気にするタイプですか）を加え、予備質問④であったものを質問⑥「被検者と主人公との類似点」とした。質問④と質問⑤に焦点を当てるため、質問⑥には「今挙げてもらった特徴を踏まえて」という言葉を加えた。質問⑦「主人公の対人関係」（予備質問⑤）では、主人公が自分の対人関係をどのように捉えているかを尋ね、そのイメージがポジティブかネガティブかを尋ねた。それに伴い、質問⑧「被検者と主人公との対人関係の類似点」（予備質問⑥）でも同様に対人関係の捉え方とイメージを尋ねた。予備質問②，⑦，⑧はそのまま用い、それぞれ質問②，⑨，⑩とした。

(2) 結果と考察

1) 改良した質問への回答

被検者全員が、各質問に対して 1 つ以上の回答をした。分類は予備質問と同様の方法で行なった（表 14）。

質問①では、物語についての回答を求めたにも関わらず、主人公について

表13 改良した質問項目の内容と順序

質問①	「物語の共通点や特徴」 自分が作った物語を通して、何か共通点や特徴はありますか。
質問②	「物語の印象」 物語全体の印象は明るい（ポジティブ）ですか、暗い（ネガティブ）ですか。
質問③	「主人公の特徴」 [各物語の主人公を特定してもらった上で] これらの物語の主人公の特徴として、どのようなものがありますか。（ <u>主人公全員をまとめて→個別の主人公について→主人公全員をまとめて</u> ）
質問④	「主人公の自己イメージ」 <u>挙げてもらった主人公の特徴も踏まえて、主人公たちは自分で自分をポジティブに捉えていますか、それともネガティブに捉えていますか。</u>
質問⑤	「主人公の対人不安傾向」 <u>主人公たちは、他者との付き合いが苦手だったり、他者からの評価を気にするタイプですか。</u>
質問⑥	「主人公との類似点」 <u>今挙げてもらった主人公の特徴を踏まえて、自分と似ている点は思い浮かびますか。</u>
質問⑦	「主人公の対人関係」 [各物語における、主人公と登場人物との対人関係を示して] 主人公と他の登場人物との対人関係について、何か特徴はありますか。 <u>また、主人公は自身の対人関係についてどのように捉えていますか。そのイメージはポジティブですか、ネガティブですか。</u>
質問⑧	「対人関係の類似点」 物語の中の対人関係の特徴と、自分の対人関係と比べてみて、似ているところはどんなところですか。また、主人公の対人関係の捉え方やイメージと自分自身の対人関係の捉え方やイメージを比較すると、どうですか。
質問⑨	「被検者の経験と物語の比較」 これらの物語の中に、自分が今まで経験したことに似ている物語はありますか。それはどの物語で、実際にはどのようにになりましたか。
質問⑩	「気づいた点」 最後に、作った物語や今までの質問と照らし合わせて、自分自身についての考え方の傾向や、自分と周りの対人関係についてどう思っているか、などのことで、気づいた点はありますか。

注) 下線部分は改良部分

の回答が多かった（56.5%）。本研究で用いた TAT 図版にはすべて人物が描かれており、その人物が主となって物語が展開することから、人物の様子や雰囲気は物語の内容にも大きく影響したと考えられる。

質問②では、物語の印象を「ネガティブと捉えたが、ポジティブにしていきたい」という願望を答えたもの

（17.4%）や、「物語の流れとしてネガティブからポジティブになっていく」としたもの（17.4%）が見られた。また、ポジティブとしたもの（26.1%）も見られたが、「個々の物語ではネガテ

ィブな印象ももっているが、全体的にはポジティブである」というものが多く見られた。

質問③では、始めに主人公の現在の状態や形式面について回答し、個々の主人公の特徴について尋ねた後には主人公の性格面について回答したものが26.1%あり、最初に主人公全員について尋ねたときよりも、各主人公の特徴について回答させた後の方が、主人公の性格について回答されやすくなった。各主人公の特徴について尋ねたことにより被検者が1つの物語に集中し、そこに登場する主人公についてじっくり

考えることができたことで、物語の状況から浮かび上がる主人公の内的特徴について言及しやすくなったと考えられる。

質問④では、主人公の自己イメージをポジティブに捉えているものが47.8%，ネガティブに捉えているものが34.8%，どちらともいえないニュートラルであると捉えているものが17.4%であった。回答の中には「ネガティブなところもあるけど、基本的にはポジティブ」など、主人公の自己イメージが多面的であることを意識しているものが少なくなかった。TAT 物語では、それぞれの場面における個人の現実的・具体的な生き方が捉えられるため（安香・藤田，1997），各図版の主人公に対して、被検者がもつさまざまな自己イメージが投映されたと考えられる。そのため、それぞれの主人公がもつ自己イメージは多様で、それらを統合して答えたときに、ひとつに絞りにくかったものと考えられる。

質問⑤では、それぞれの主人公がもつ対人不安傾向についての回答がなされた後、それらを統合して全体の対人不安傾向を回答したものが多く見られた。これは、質問②と同様の回答の仕方であった。質問⑤ではこのような指示はなかったが、各主人公のもつ対人不安傾向に言及してから全体的な傾向について考える方が回答しやすかったと考えられる。

質問⑥と質問⑧は、質問③，④，⑤，⑦での回答をもとになされることが多かった。主人公について多くの特徴を尋ねることによって多くの類似点が見出され、また「自分に似ている」、「自分と同じ」という回答も見られた。物語だけでは曖昧であった主人公の特徴が、TAT 物語作成後の質問をもとに考えることでより明確になり、被検者自身が認識している自分自身の特徴と比較しやすくなったと考えられる。

質問⑦では、主人公の対人関係の捉え方についての回答が多く見られた

（87.0%）。予備質問⑤では、現状や願望が多く見られたが、改良した質問では、主人公の特徴をより詳細に尋ねてから質問⑦を行なったため、主人公の内的特徴が答えられやすくなったと考えられる。

質問⑨では、ほぼすべての被検者が物語の中に自分の経験と似ているものがあると回答した。これらは、実際の自分の経験と同じような結果になったものもあれば、異なった結果になったものもあり、物語のすべてが被検者の経験と合致するものではなかった。また、物語と似ているとされた経験に対する捉え方についても、ポジティブ、ネガティブ、ニュートラルが同じ割合で見られた（30.4%）。物語と似ているとされた経験に対する捉え方の差が見られなかったことから、TAT 物語には被検者のさまざまな経験が影響することが示された。

質問⑩では、自分については性格が、対人関係についてはその捉え方が回答されるようになった。被検者は主人公に関する質問によって、物語では語られなかった主人公の内的特徴や対人関係についても思い浮かべ、主人公についてさまざまな想像を巡らせた。また、類似点についての質問から、主人公と自分自身を比較して考えることも可能となった。最後に質問のまとめとして、質問⑩を行なったことにより、それまでの自分の回答を振り返ることができた。これによって、すでに知っていた自分の特徴やこれまで気づかなかった自分の一面を捉え、言語化することが可能となり、自己理解が促されたと考えられた。

2) 改良した質問における対人不安と自己肯定意識の表れ方

対人不安得点と自己肯定意識得点について Kolmogorov-Smirnov 検定を行ない、正規分布であることを確認した（対人不安： $z=.60$, $p>.05$, 自己肯定意識： $z=.48$, $p>.05$ ）。そして、対人不安得点の上位 25%（10名：男性 3名，

表14 改良した質問項目の回答内容の分類

質問項目	分類内容		人数(%)
①物語全体の特徴や共通点	物語の印象・雰囲気について言及	ポジティブ	3(13.0)
		ネガティブ	3(13.0)
		ニュートラル	3(13.0)
	主人公について言及	内面について(例:みんな悩んでいる)	8(34.8)
		行動について(例:思いつきの行動が多い)	2(8.7)
	様子について(例:悩んでいるような顔)	3(13.0)	
	物語の形式面について言及(例:物語が短い)	7(30.4)	
	感想	2(8.7)	
②物語全体の印象	ネガティブ	9(39.1)	
	ネガティブからポジティブに変わっていく	4(17.4)	
	ネガティブからポジティブにしたい(願望)	4(17.4)	
	ポジティブ	6(26.1)	
③主人公の特徴	性格面について言及(例:協調性がある,物静か)	15(65.2)	
	図版の場面の状態について言及(例:何か考え込んでいる)	14(60.9)	
	各図版の主人公それぞれに言及(全体の特徴への言及なし)	2(8.7)	
	形式面について言及(例:大きく映っている人を主人公にする)	6(26.1)	
	「自分に似ている」との回答	3(13.0)	
	主人公へのアドバイスを言及	1(4.3)	
	感想	2(8.7)	
④主人公の自己イメージ	ポジティブ	11(47.8)	
	ネガティブ	8(34.8)	
	ニュートラル	4(17.4)	
⑤主人公の対人不安傾向	対人関係の好悪	積極的,好き	2(8.7)
		できるだけ消極的	14(60.9)
		苦手	8(34.8)
	他者からの評価	気にする	9(39.1)
		条件によっては気にする	3(13.0)
		気にしない	9(39.1)
	各物語の主人公別に言及	1(4.3)	
⑥主人公との類似点	性格面について言及(例:根は明るいところが似ている)	22(95.7)	
	行動傾向について言及(例:周囲が困っていたら助ける)	11(47.8)	
	客観的視点で言及(例:苦手だが,他人から見たらできている)	3(13.0)	
	主人公をうらやましがる	1(4.3)	
	主人公へのアドバイス	1(4.3)	
	意見・感想	1(4.3)	
⑦主人公の対人関係	特徴	捉え方(例:うまくいっている)	20(87.0)
		形式面(例:家族が多い)	11(47.8)
	イメージ	ポジティブ	14(60.9)
		ネガティブ	2(8.7)
		ニュートラル(例:どちらとも言えない)	3(13.0)
		不安定(例:両極端)	2(8.7)
⑧対人関係の類似点	対人関係全体について言及	11(47.8)	
	友人関係について言及	9(39.1)	
	家族関係について言及	8(34.8)	
	捉え方について言及(例:良い関係にあると思っている)	13(56.5)	
	イメージ	14(60.9)	
	現在の状態・行動傾向(例:上下関係では下,悩みは家族に相談する)	10(43.5)	
	願望(例:みんなと仲良くしたい)	3(13.0)	
	自分と同じ	4(17.4)	
	各物語別の対人関係に言及	1(4.3)	
⑨被検者の経験と物語の比較	ポジティブに捉えている(例:一生懸命練習してうまくなった)	7(30.4)	
	ネガティブに捉えている(例:嫌な仕事を押し付けられた)	7(30.4)	
	ニュートラルに捉えている(例:稲刈りをきょうだいそろって見ていた)	7(30.4)	
	どちらとも言えない,と捉えている	2(8.7)	
⑩気づいた点	【自分に対して】		19(82.6)
	新たな気づき	性格(例:悩む癖があるのかな)	2(8.7)
		イメージ(例:意外とポジティブ)	2(8.7)
	再認識	性格(例:自己主張しないところ)	8(34.8)
		イメージ	11(47.8)
		現在の状態・行動傾向	2(8.7)
		願望	1(4.3)
	【対人関係に対して】		15(65.2)
	新たな気づき	イメージ(例:思ったよりネガティブだった)	3(13.0)
		状態・行動傾向(例:友達の前では自分を出さない)	1(4.3)
	再認識	捉え方(例:前向きではない)	7(30.4)
		行動傾向(例:共通点がないと関係を作らない)	8(34.8)
		イメージ(例:基本的にネガティブ)	3(13.0)
		願望(例:信用できる対人関係を作りたい)	3(13.0)
	自分と同じ	3(13.0)	
	物語や主人公への感想	9(39.1)	

女性 7 名) を対人不安高群, 自己肯定意識得点の上位 25% (8 名: 男性 2 名, 女性 6 名) を自己肯定意識高群とし, 対人不安得点の下位 25% (9 名: 男性 1 名, 女性 8 名) を対人不安低群, 自己肯定意識得点の下位 25% (8 名: 男性 2 名, 女性 6 名) を自己肯定意識低群とした。

対人不安の高い傾向にある学生では, 質問②と質問⑥で多く見られた回答があった。まず, 質問②では「最初ネガティブだが, ポジティブにしたい・なっていく」という回答が多かった。TAT では, 図版から受けたネガティブな印象が物語に反映され, 主人公やその他の人物の印象, 対人関係などもネガティブなものとして捉えられることが多いと思われる。しかし, 対人不安の高い傾向にある学生は, 対人関係を肯定的に維持したいことから, そこに描かれた人物や対人関係のネガティブな印象から, なんとかポジティブなものを見出そうとしていたことがうかがわれた。

質問⑥では, 周囲からの視線を気にしているという回答や対人関係に対して消極的であるという回答が多く見られた。対人不安には他者からの評価が大きく影響しているが, 特に大学生における対人不安では視線恐怖的心性を中心とした対他の要因が明確に表れる (堀井・小川, 1997)。さらに, 対人恐怖的经验は, 他者からの評価をネガティブなものとして予想する経験であるため (伊藤, 1997), 対人不安が高い傾向にある学生は, ネガティブな評価を恐れて積極的な他者との関わりをもちづらくなることが考えられる。これらの特徴や傾向が「主人公の特徴」として語られ, それと自分を比較して「似ている」と感じたと考えられる。

一方, TAT 物語作成後の質問によって自己肯定意識の高低による特徴は見られなかった。これは, 質問④で自己肯定意識に注目させたが, 自己肯定意識の高低やその特徴を明らかにするた

めの質問内容が不十分であったためと考えられる。

3) 改良した質問による自己理解

TAT 物語作成後の改良した質問を実施した際, 「自分と同じ」, 「自分そのまま」, 「自分と似ている」といった回答がなされることがあり, 質問⑩でも自分やその対人関係について新たに気づいた点や再認識した点についての回答が多く見られた。これは, TAT 後の質問によって, 被検者自身が物語の主人公に自分自身を投射していたことに気づき, そこに投射されている特徴についても気づくことができたことを示している。しかし, これらの気づきは, 質問を行わなくても, TAT 物語を作成した後, あるいはその途中で被検者自身が感じていたものである可能性もある。従来のように, TAT の後に質問を行わなかった場合, これらの気づきは言語化されないまま, 被検者の中に埋もれてしまう。しかし, TAT 物語作成後の質問を行なうことによって被検者の気づきを言語化し, 被検者自身がその気づきを明確に捉えることで, 自己理解が深まるものと思われる。

また, TAT では, 物語の失敗反応がある。これは, 人物の状況やその内面を説明していないものや, 2 者以上が描かれている場合であれば, その関係性に一切触れていないものなどのことである。この失敗反応からも, 検査者は「被検者はなぜこの図版をこのように捉えたのか」という分析を行なうが, 物語の内容に豊かさが少ないため, 分析が困難になってしまうことも考えられる。本研究でも, 物語の内容に乏しく, 失敗反応に近いものがあった。しかし, そのような場合でも, TAT 物語作成後の質問では, 主人公の内面について回答することを通じて, 自己の再認識を行っていた。よって, TAT 物語作成後の質問は, 被検者の自己理解を促進するだけでなく, 検査者の被検者理解を深めるための一助となることが示唆された。

IV 総合考察

本研究では、TAT 物語の中に対人不安や自己肯定意識がどのように表れるかを明らかにし、それらについて被検者の自己理解を促す TAT 物語作成後の質問項目を生成することによって、TAT の臨床的有用性を高めることを目的とした。

研究 1 では、対人不安の高い学生は「対人関係をポジティブなものに維持したい」という物語を作成した。また、研究 2 の TAT 物語作成後の質問では、周囲からの視線を気にするという回答や対人関係に対して消極的であるという回答が見られた。これらは、対人不安の対他的要因（対人場面での不安、視線恐怖心性など）が反映されたものと考えられる。対人不安の高い学生は、他者からの否定的評価に過敏であるため、無意識的に対人関係を良好に維持しようと試みている可能性がある。また、他者からの評価に敏感であれば、他者の目や視線が気になると思われる。このような対人不安の特徴が、物語の内容や物語作成後の質問に反映されることが示された。

また、対人不安の高い学生は研究 1 で「現状から脱出したい」という願望が表れた物語を作った。また、研究 2 の TAT 物語作成後の質問で、物語の印象について尋ねると、ネガティブな印象からポジティブな印象へ変化すると答えた。このことから、対人不安の高い学生は、現在の状況よりよくしたいという願望を持っていると考えられる。対人不安の高い学生は、自己評価の基準が高いため (Leary, 1990)、その基準に向かって自己を高めようと努力していると考えられ、その姿勢が物語の内容やその印象に影響した可能性がある。

一方、自己肯定意識の高い学生では、研究 1 で物語の内容に肯定的な対人関係や未来への希望が表れていた。TAT 物語は暗い印象のある図版をもとに作成されるため、暗い場面が語られるこ

とが多い。しかし、その中でも明るい内容が多く語られたことは、自分を肯定的に捉えていることと関係している可能性がある。しかし、研究 2 の TAT 後の質問ではさまざまな回答があり、自己肯定意識が高い学生に特徴的な回答は見出されなかった。

さらに、研究 2 では TAT 物語作成後の質問によって被検者の気づきを言語化することで、自己理解促進の一助となることが示された。また、物語作成後の質問による被検者の気づきは、内容の乏しい物語からも起こることが明らかとなった。TAT 物語は、語り手の内面にある衝動や欲求をそのまま映し出すものではない (山本, 1992)。物語に表現されているものは、被検者の思考や内面のすべてではなく、被検者の想像力の一部である。物語のみでは表現されなかった被検者の思考や内面が、TAT 物語作成後の質問によって表れたと考えられ、これは被検者がもつ内的イメージを表現させる刺激になると思われる。

V 今後の課題

本研究では、対人不安および自己肯定意識についての自己理解を促す質問項目の生成を試みたが、自己肯定意識の特徴を理解するために有用な質問項目とは言えなかった。よって、今後も自己肯定意識についてより明確に焦点づけることのできる質問項目に改良していく必要がある。

引用文献

- 安香 宏・藤田宗和 1997 臨床事例から学ぶ TAT 解釈の実際 新曜社
 Clark, J.V., & Arkowitz, H. 1975 Social anxiety and self-evaluation of interpersonal performance. *Psychological Reports*, 36, 211-221.
 林 洋一・小川捷之 1981 対人不安意識尺度構成の試み 横浜国立大学保健管理センター年報, No.1, 29-46.

- 平石賢二 1990 青年期における自己意識の構造—自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康— 教育心理学研究, 38(3), 320-329.
- 堀井俊章・小川捷之 1997 青年期における対人不安意識の発達の變化心理臨床学研究, 14(4), 448-455.
- 伊藤直樹 1997 対人恐怖的他者認知尺度作成の試み 心理臨床学研究, 15(3), 309-316.
- 岩崎初美 2006 青年期における対人不安と社会的スキル向上意欲についての一研究 2006年度徳島大学総合科学部人間社会学科卒業論文未刊行
- 木村法子 1983 対人恐怖についての一考察—TATに表された自己と他者を通して— 京都大学教育学部紀要, XXIX, 134-144.
- Leaty, M.R., 生和秀敏 (監訳) 1990 対人不安 北大路書房
- Meichenbaum, D.H., Gilmore, J.B., & Fedoravicius, A. 1971 Group insight versus group desensitization in treating speech anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 36, 410-421.
- Rehm, L.P., & Marston, A.R. 1968 Reduction of social anxiety through modification of self-reinforcement. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 32, 565-574.
- Russel, D., Peplau, A., & Cutrona, C. 1980 The revised UCLA Loneliness Scale: Concurrent and discriminant validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 472-480.
- Schlenker, B.R., & Leary, M.R. 1982 Social anxiety and self-presentation: A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, 92, 641-669.
- 調 優子・高橋靖恵 2002 青年期における対人不安意識に関する研究—自尊心, 他者評価に対する反応との関連から— 九州大学心理学研究, 3, 229-236.
- 鈴木睦夫 1997 TATの世界—物語分析の実際 誠信書房
- 鈴木睦夫 2004 TATとロールシャッハ・テスト—相似点と相違点— 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 4(1), 11-25.
- 高橋雅春 1986 HTTPテスト 臨床描画研究, I, 51-67.
- 富田俊昭・水子 学・金光義弘 1999 認知的概念モデルによる対人不安の検討—自己意識特性, 自己評価および対人不安の関連について— 川崎医療福祉学会誌, 9(1), 49-54.
- 唐 皓 2007 対人不安と自尊感情・対人信頼感の関連について 臨床教育心理学研究, Vol.33, No.1, 103
- 坪内順子 1984 TATアナリシス 垣内出版
- 渡部敦子 2003 対人不安と自己呈示—さまざまな対人場面における自己呈示動機付けと効力感について— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 第51巻, 187-196.
- Watson, D., & Friend, R. 1969 Measurement of social-evaluative anxiety. *Journal of Consulting Clinical Psychology*, 33, 448-457.
- 山本和郎 1992 心理検査 TAT かかわり分析—ゆたかな人間理解の方法 東京大学出版会

付記：本研究は、2008年度に徳島大学大学院人間・自然環境研究科（臨床心理学専攻）に提出した修士論文を一部加筆・修正したものである。研究にご協力くださいました学生の皆様に、心から感謝申し上げます。

(受付日2011年9月30日)

(受理日2011年10月14日)